

神に献げられた芳しいキリストの香り

ベレーシート

●今日の礼拝は、セレブレイト・ハヌッカーにおける唯一の主日礼拝で八日目に当たります。今回、アシユレークラス主催の「スッコート」に次いで二回目の祭りを行っています。というのも、「スッコート」と「ハヌッカー」の祭りは二つで一つの祭りだからです。ハヌッカーの内容は「ブライダル・パラダイム」を中心に、旧約聖書の雅歌を取り上げています。雅歌は「ブライダル・パラダイム」の宝庫だからです。

●「ブライダル・パラダイム」(Bridal Paradigm)とは、キリストと教会のかかわりを「花婿と花嫁」という視点で見るとのことです。これは神のご計画を常に意識しながら歩む上で、きわめて夢のある終末的、未来的志向を持ったたとえです。すでに婚約は成立していますが、まだ結婚していない状態です。しかし必ず将来、結婚することが定められているのです。このような花嫁は花婿を待つ「待ちの状態」に置かれているのですが、「すでに」と「いまだ」の緊張感の中で、花婿が迎えに来ることをひたすら待ち望んでいるのです。そのことを独自の世界で表しているのが「歌の中の歌」、すなわち「雅歌」なのです。今回はこの「雅歌」にある「香油」(「ハツシエメン」 מִשְׁחָה)について取り上げたいと思います。といっても、その中の一部しか取り上げることができませんが、香りは神にとってきわめて重要であることを知ってほしいと思います。「香り」は、「香油」にしても、「香料」にしても、また「立ち上る煙」にしても、それは**神と人の麗しいかかわりを啓示する象徴**なのです。

1. 幼子イエシュアに献げられた乳香と没薬

【新改訳 2017】マタイの福音書 2章 1～2, 11 節

- 1 イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東の方から博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。
- 2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」
- 11 それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

●イエシュアが誕生したことを不思議な星で知った東方の博士たちが、幼子を礼拝するためにやって来て、宝の箱から「黄金、乳香、没薬」を贈り物として献げた話です。「黄金」(「ザーハーヴ」 זָהָב)は王として生まれた方に対しては当然の贈り物です。しかしなぜ「乳香」(「レヴォナー」 לְבוֹנָה)と「没薬」(「モール」 מוֹר)だったのでしょうか。この二つはいずれも香料です。しかし、これらがこの幼子の生涯を表す重要なたとえとなっているのです。表記の順序は逆になりますが、「没薬」は**キリストの死を意味し**、「乳香」は**キリストの復活を意味している**のです。ですからこの二つの香料を献げたということは預言的な意味をもっているのです。神の御子イエシュアに託された贖いの出来事の中心的な出来事、つまり、「死と復活」

を指し示すものだったのです。雅歌の中でも、この「没薬」と「乳香」は花婿を表す記述の中にセットで置かれています(3:6, 4:6,14)。

●モーセの幕屋では、香の祭壇でたかれる聖なる香がそのことを啓示しています。

【新改訳 2017】出エジプト記 30 章 34～38 節

34 【主】はモーセに言われた。

「あなたは香料の**ナタフ香**、**シェヘレテ香**、**ヘルベナ香**と**純粹な乳香**を取れ。これらは、それぞれ同じ量でなければならない。

35 これをもって、調香の技法を凝らして調合された、塩気のある、きよい、聖なる香を作れ。

36 また、その一部を打ち砕いて粉にし、その一部を、わたしがあなたと会う会見の天幕の中のかしの箱の前に供える。これは、あなたがたにとって最も聖なるものである。

37 その割合で作る香を自分たちのために作ってはならない。それはあなたにとって、
【主】に対して聖なるものである。

38 これと似たものを作って、これを嗅ぐ者は、自分の民の間から断ち切られる。」



●ここでは聖なる香が、四種類の香料をすべて同じ量で、^{ちようこう}調香の技法を凝らして調合されたものであることが記されています。これに少量の塩を入れて造られるのです。これは聖所の中の香の祭壇の炉に入れる芳しい聖なる香料で、神にのみ献げられるものです。

- ① 「**ナタフ香**」(「ナーターフ」 נָטָף) は「**没薬**」のことです。香りは甘いのですが、その味は苦いのです。つまり**キリストの死**を表象しています。聖書で没薬は葬りのために用いられています。イエシュアの葬りのときに、ニコデモやアリマタヤのヨセフは没薬を準備したことが記されています(ヨハネ 19:38～40)。没薬は香りの良い木から樹液として採取され、死の苦しみを和らげるために用いられました。イエシュアが十字架につけられた時に、苦痛を和らげるやわらげる没薬を混ぜたぶどう酒が差し出されました。しかしイエシュアはそれを拒まれています(マタイ 27:34)。イエシュアは私たちに代わって罪の苦しみをまともに受けられたのです。
- ② 「**シェヘレテ香**」(「シェヘーレット」 שֵׁהֶלֶט)も、キリストの死を意味します。ナタフの香りを引き立たせる役割を担っていると考えられます。
- ③ 「**ヘルベナ香**」(「ヘルベナー」 הַלְבָנָה)は「脂肪」のことで、最良のもの、すなわちイエシュアの御父に対する全き謙遜(全き献身)の生涯を表象しています。
- ④ 「**乳香**」(「レヴォーナー」 לְבוֹנָה)の色は白で、神性を表し、**キリストの復活**を表象しています。

●このように①～③はキリストの従順と死の表象、④はキリストの復活を表象していることが分かります。東方の博士たちが献げたものと同じ内容となっています。幕屋で用いられる香はすべてキリストを表しています。神の幕屋であるキリストは目に見える人となって来られましたが、聖書はその方のなされることを「**香**」(「ケトーレット」 קְטוֹרֶת)で表しているということです。しかもその香は神に対してのみ献げら

れるものです。神にとって、香は芳^{かんば}しいものでなければならなかったのです。

2. 全焼のささげ物は神にとって芳しい

●聖書において、「全焼のささげ物」を神に献げたのはノアが最初でした。彼は箱舟から出た後に、このささげ物をしています。

【新改訳 2017】創世記 8 章 20～21 節

20 ノアは【主】のために祭壇を築き、すべてのきよい家畜から、また、すべてのきよい鳥からいくつかを取って、祭壇の上で**全焼のささげ物を献げた**。

21 【主】は、その**芳ばしい香りをかがれた**。そして、心の中で【主】はこう言われた。「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろいをもたらさしめない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。わたしは、再び、わたしがしたように、生き物すべてを打ち滅ぼすことは決してしない。

●ノアは主のために祭壇を築き、祭壇の上で**全焼のささげ物**(「オーラー」**הָלֵל**)を**献げた**(「アーラー」**הָלַל**)。そして、主はその**芳ばしい香り**(「レーアツハ・ハンニーホーアツハ」**חַנְיָהוּ הַחַיִּי**)を**かがれました**(「ラーヴァハ」**חָנַח**)。神に献げられたいけにえは、「**芳ばしい香り**」です(21 節)。「芳ばしい」(「ニーホーアツハ」**חַנְיָהוּ**)は「休む、とどまる、休ませる、憩わせる、安らかにする」を意味する動詞「ヌーアツハ」(**חָנַח**)の派生語です。「ヌーアツハ」(**חָנַח**)の名詞は「メヌーハー」(**מְנוּחָה**)で「憩い、身の落ち着きどころ」を意味します。神は人の献身を芳ばしい香りとしてかがれるのです。それは神にとって麗しい価値あるものなのです。

●この**全焼のささげ物**(「オーラー」**הָלֵל**)の唯一の本体は**イエシュアご自身**です。幕屋のすべては本体の写しにしか過ぎません。全焼のささげ物の香りを**かがれた**(「ラーヴァハ」**חָנַח**)という動詞は、「気を晴らす、喜ぶ、満足する、受け入れる」という意味があります。そこから名詞の「**満ち溢れること、充溢、充滿**」を意味する「レヴァーヤー」(**הִשְׂבַּח**)が派生しています。詩篇 23 篇 5 節にある「私の杯は**あふれています**」がそれです。

●使徒パウロはピリピ 4 章で、「私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。」と述べています。パウロという人は、「富」とか、「豊かさ」といったことばを好んで用いた人です。また「あらゆる」「どんなことでも」「さらに」「はるかに」「すべて」「・・・を越えて」「測り知ることのできない」「余すところなく」という最上級のことばをよく用いています。しかもそうした語彙を作り出しています。

●まさにパウロが言うように、「神は、私の必要をすべて満たしてくださる」方なのです。けちな神ではなく、並外れてリッチな神です。しかもその満たし方が尋常ではありません。「キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自身の豊かさにしたがって」なのです。これは「ご自分の豊かさに応じて」という意味です。・・・に従って」「・・・に応じて」という意味なのです。私たちはキリストにあってこのような**神の歓迎にあずか**

っているのです。まさに詩篇 23 篇後半は「神の歓迎」を表しています。それは、私たちをして、「私の杯はあふれています」と告白せしめるためです。神はその歓迎によって、キリストの香りを私たちが放つようにして下さるのです。

●ノアは神に対して「全焼のささげ物」を献げましたが、アブラハムも同様です。幕屋においては、「**全焼のささげ物**」とは**自発的なささげ物**です。義務的、強制的なものではありません。新約では、ベタニアのマリアがそれと同等のものを献げています。それは動物ではなく、彼女の婚礼用に備えられていたナルドの香油をすべてイエシュアの頭に注いだことで、そのことが示されています。

【新改訳 2017】マルコの福音書 14 章 3～9 節

- 3 さて、イエスがベタニアで、ツアラアトに冒された人シモンのおられたときのことである。食事をしておられると、ある女の人が、純粹で非常に高価なナルド油の入った小さな壺を持って来て、その壺を割り、イエスの頭に注いだ。
- 4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油(「ハツシエメン」 ἵψῆον)をこんなに無駄にしたのか。
- 5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」そして、彼女を厳しく責めた。
- 6 すると、イエスは言われた。「彼女を、そのままにさせておきなさい。なぜ困らせるのですか。わたしのために、良いことをしてくれたのです。
- 7 貧しい人々は、いつもあなたがたと一緒にいます。あなたがたは望むとき、いつでも彼らに良いことをしてあげられます。しかし、わたしは、いつもあなたがたと一緒にいるわけではありません。
- 8 彼女は、自分にできることをしたのです。埋葬に備えて、わたしのからだに、前もって香油を塗ってくれました。
- 9 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」

●ベタニアのマリアがした行為を、イエシュアが注解しています。

①「**そのままにさせておきなさい。**」

※このことばは自発性・主体性の重要性を示すことばです。「全焼のささげ物」はあくまでも自発的でなければ価値はないからです。

②「**わたしのために、良いことをしてくれたのです。**」

※彼女の行為はイエシュアのためでした。その行為はイエシュアにとって「良い」と評価されたのです。何故、良いのでしょうか。それは「香油」が葬りのための「没薬」の香りだったからです。埋葬に備えて、イエシュアのからだに前もって香油を塗ったことが「良い」ことなのです。

※マリアはマルタと違って、イエシュアの足もとに座ってじっとイエシュアの語ることばに耳を傾けていました。彼女はそのことを選び取った人です。そのようなマリアの霊性が神のご計画を悟って、それと共有する心をもってなした行為だからです。単なる自分の思いでしたことではなかったからです。

神にとっての「良い」(「トーフ」 טוֹב)とは、神のご計画と一緒に見ていることなのです。これはアブラ

ハムにとって最後の試みでもありました。その試みの中で、アブラハムは神のご計画に対する「共感の愛」が問われたのです。

③「自分にできることをしたのです。」

※自分に与えられているもので、自分が献げられる最高のこと(最上のこと)をマリアがしたことをイエシュアは評価しました。それが「ナルドの香油」だったのです。

④「福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」

※これは何を意味しているのでしょうか。彼女がしたこととは「神に対する献身」です。その献身は、本来イエシュアがもっていた神への全き従順、御父への献身を証するという意味合いで語られなければならないのです。つまり彼女の行為はイエシュアの御父に対する全き献身の本体の写しとして語られなければならないのです。

※なぜなら、「記念」というヘブル語の「ザーハール」(זָכָר)が、創世記 1 章 27 節の「男と女」の「男」を意味しているからです。その「男」が「ザーハール」となっているのは、記念とされるべきイエシュアを指し示しているからです。この奥義をパウロが啓示を受けて語っています。

【新改訳 2017】 I コリント人への手紙 11 章 23～25 節

23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、
24 感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

25 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。
飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」

※「わたしを覚えて」の「覚えて」が「ザーハール」(זָכָר)なのです。

3. 私たち(キリストの花嫁)はキリストの香りを放つ存在

【新改訳 2017】 II コリント人への手紙 2 章 14～17 節

14 しかし、神に感謝します。**神はいつでも、私たちをキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。**

15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、
神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。

16 滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。

17 私たちは、多くの人たちのように、神のことにば混ぜ物をして売ったりせず、誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあって語るのです。

●キリストの花嫁の霊性を、パウロはここで「キリストを知る知識の香り」、および「神に献げられた芳^{かぐわ}しいキリストの香り」と言っています。これはパラレリズムで同義です。その香りは「死と復活の香り」そ

のものなのです。肉の香りではなく、死を通して復活された芳しい香りなのです。この芳しい香りを、神は私たち(花嫁)を通して、いたるところで放ってくださっているのです。その香りを放つ者こそキリストの花嫁だからです。

ベアハリート

●パウロは「私はあなたがたを清純な処女として、一人の夫キリストに献げるために婚約させたのですから」(Ⅱコリント 11:2)と語っています。そんな花嫁が蛇の悪巧みによって「思いが汚されてしまう」のをパウロは心配しているのです。花嫁の霊性は、ベタニアのマリアのように、また「ただ一つのことを求めた」ダビデのようであればなりません。ですから、花嫁は**決してイエシュアから「目を離してはいけない」**のです(ヘブル 12:2)。

●「ヘブル人への手紙」のキーワードは「**イエシュアを仰ぎ見る**」ことです。キリストの花嫁は、死んでよみがえられたイエシュアをひたすら「仰ぎ見る」「見つめる」「目を注ぐ」(「アフォラオー」 $\alpha\phi\omicron\rho\rho\alpha\omega$)者でなければなりません。「アフォラオー」($\alpha\phi\omicron\rho\rho\alpha\omega$)とは、イエシュアを見つめるために他のすべてのものを見るのをやめることを意味します。真の花嫁とは完全な集中力をもってイエシュアを見つめ(仰ぎ)、驚きのまなざしをもって見る存在です。それはまさに雅歌の「**私の愛する方**」=「ドーディー」(דודי)です。My Jesusの世界です。私たちの気を散らす一切のものから目をそむけて、ただイエシュアにのみ目を注ぐ・・・、愛するというのとはそういうことではないでしょうか。

●自分が今直面している問題や周囲の状況にばかり気を取られたり、あるいは自分自身や自分の弱さにばかり気を取られたりすると、見なければならぬ大切なものを見ることができなくなってしまいます。自分自身ではなくて、「**私の愛する方**」(「ドーディー」 דודי)に目を向けることです。なぜなら、この方こそ私にとって最も必要な方だからです。ヘブル人への手紙が言わんとするように、私たちの霊の目をもって、イエシュアから目を離すことなく、イエシュアだけを仰ぎ見、私たちのまなざしをイエシュアにしっかりと固定して、イエシュアに目を注がなければなりません。これが花嫁の霊性なのです。

2022.12.25 セレブレイト・ハヌッカーの主日礼拝